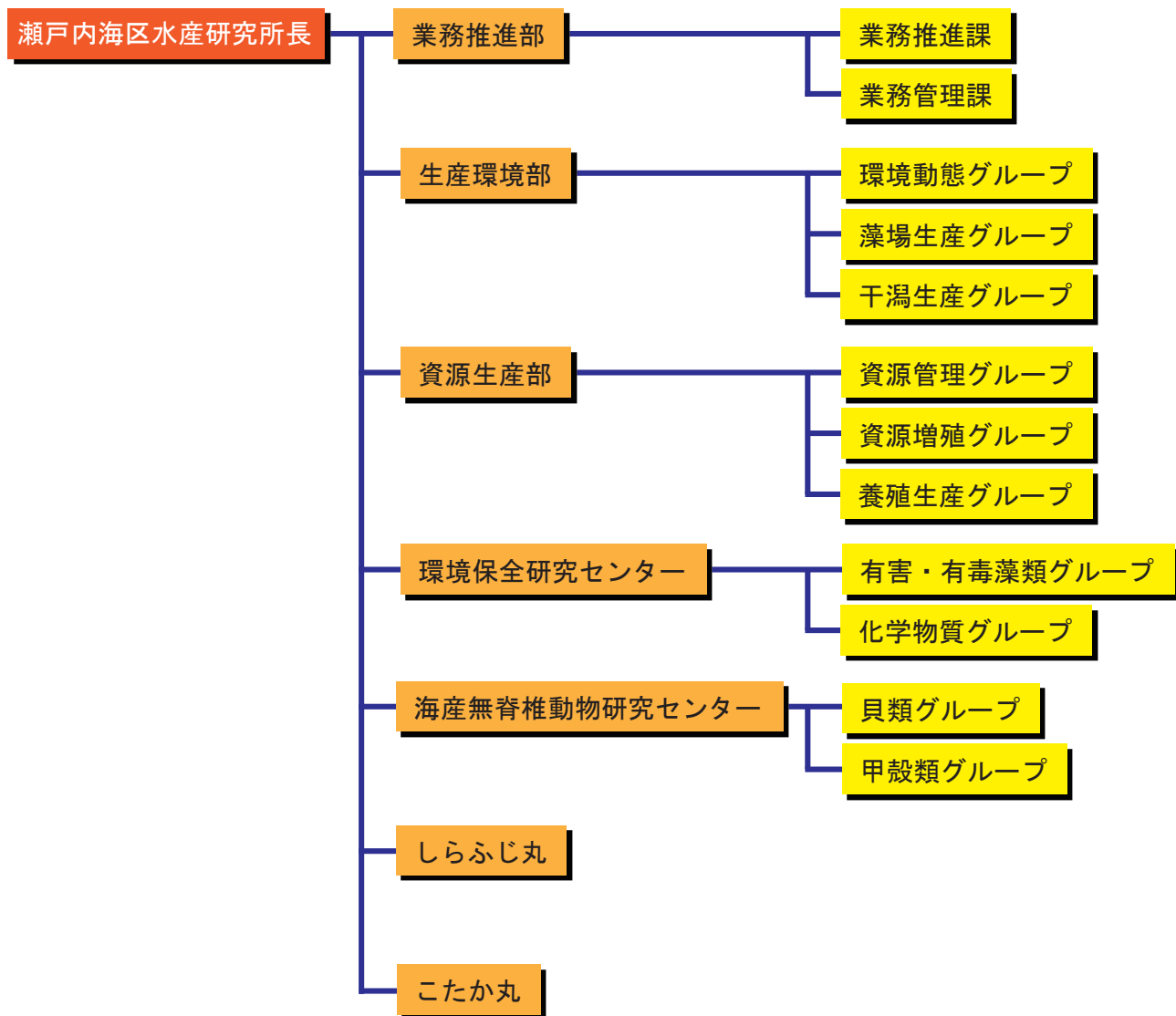


国立研究開発法人水産研究・教育機構
瀬戸内海区水産研究所



瀬戸内海区水産研究所組織図



廿日市庁舎（本所）

〒739-0452 広島県廿日市市丸石 2-17-5

TEL:0829-55-0666（代） FAX:0829-54-1216

伯方島庁舎（資源生産部 資源増殖グループ）

〒792-2305 愛媛県今治市伯方町木浦甲 2780

TEL:0897-72-0204（代） FAX:0897-72-2544

百島庁舎（海産無脊椎動物研究センター）

〒722-0061 広島県尾道市百島町 1760

TEL:0848-73-5020（代） FAX:0848-73-5340

屋島庁舎（資源生産部 養殖生産グループ）

〒761-0111 香川県高松市屋島東町 234

TEL:087-841-9241（代） FAX:087-841-9242

業務推進部

研究開発を 円滑に推進するためのサポート部門

研究所の運営に係る企画立案、連絡調整、推進及び進行管理並びに研究所の管理や研究部、研究センター、部における業務運営に対する支援業務を行っています。

業務推進課

研究開発の総合的な企画立案や所内外との連絡・調整を行うとともに、国内外の研究者との交流の推進、研究情報、図書資料の収集を行っています。また、研究成果等の公表・情報発信、取材対応等の広報関係業務も行っています。



研究所一般公開の様子

業務管理課

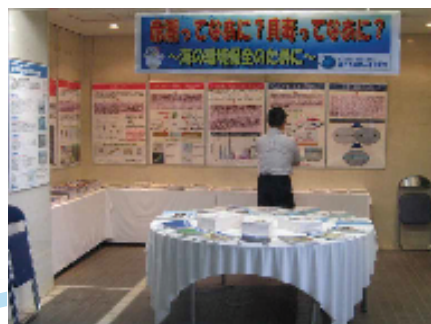
文書管理、職員のサービス・人事・給与・福利厚生、予算管理、物品役務の調達、施設の維持管理等の業務を行い、研究開発業務を支えています。



研究成果発表会の様子



地域の教育活動への協力



研究成果等の公表・情報発信



取材対応の様子

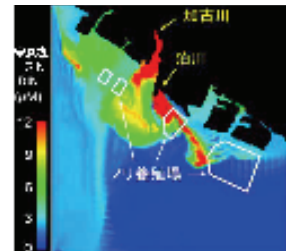
生産環境部

生命をはぐくむシステムを探り、 瀬戸の恵みをいつまでも

私たちの食卓を豊かにする有用魚介類の生産は、海にすむ大小様々な生き物たちがお互いにつながりあうことによって支えられています。生産環境部では、藻場や干潟、湾・灘までを広く研究の場とし、環境と生き物、生き物たち相互の関係を通して、瀬戸内海の「幸」が育まれる仕組みを明らかにし、その恵みを持続的に利用する方法について研究しています。

環境動態グループ

瀬戸内海における水温や栄養塩などの海水環境から、プランクトンなど低次の生物生産まで、持続的な漁業生産を支える環境の把握と保全などを研究しています。



ノリ漁場における水質シミュレーション

藻場生産グループ

海藻・海草が豊かに生い茂る藻場の生態学的役割の解明とその保全手法の開発、そしてそれを通じて有用海藻類や魚介類の持続的な生産を支えるための研究を行っています。



漁業調査船しらふじ丸を利用した海洋調査（ニスキン採水器による海水採取）

干潟生産グループ

瀬戸内海の持続的な漁業生産を支える干潟について、生産や浄化を担う機能を明らかにするなど漁業生産や生態系保全のために役立つ研究をしています。



干潟のベントス調査



バルーンを用いた空撮による藻場の分布調査と島嶼沿岸の藻場



ノリ漁場における海洋調査（塩分計、流速計の設置）



干潟に広がるアサリ漁場



アマモ場に群れるメバル稚魚

資源生産部

未来へつなぐ、 つくり育てる漁業

資源生産部では、主に瀬戸内海の魚類の重要漁業資源を有効かつ持続的に利用する研究開発を、3つの庁舎で行っています。資源の状態を調べ、それに応じた資源管理や種苗放流などの対策に必要な手法や技術を開発するとともに、これらを利用した漁業現場での実証も行います。また、市場等からの要請に応じた、資源が減少した種に関する養殖技術の開発も行っています。



広域にわたって回遊する高級魚トラフグ



定着性が高い沿岸漁業の重要な漁業資源のキジハタ



瀬戸内海の重要な漁業資源のカタクチイワシ

資源管理グループ（廿日市庁舎）

瀬戸内海におけるサワラやトラフグ、カタクチイワシなどの水産生物資源を上手に管理して持続的に利用するため、それらの成長特性や環境との関係などを研究しています。



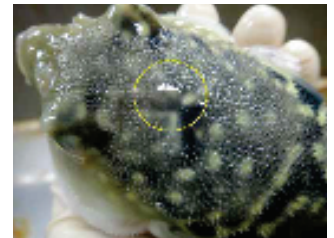
ボンゴネットによる卵仔魚の採集



海洋環境の測定（右上）と採水器（左下）による採水

資源増殖グループ（伯方島庁舎）

広域にわたって回遊し、複数の府県が利用する高級魚のトラフグや定着性が高く沿岸漁業の重要な収入源であるキジハタ等の資源造成技術の研究開発を行っています。また、放流した魚を追跡する際の目印となる安全で見分けやすい標識の研究開発や瀬戸内海の重要な漁獲資源であるカタクチイワシやイカナゴの加入変動機構の解明に関する研究開発も行っています。



調味料や清涼飲料水に使われる有機酸で体表のトゲを消失させて標識したトラフグ

養殖生産グループ（屋島庁舎）

瀬戸内海の重要魚介類の養殖研究を行っており、特に、環境保全や疾病防除等に対してメリットの高い閉鎖循環システム開発とそれを用いた種苗生産・養殖研究を主体として地域の養殖産業の創出も視野に入れて取り組みます。



閉鎖循環システムのユニット水槽

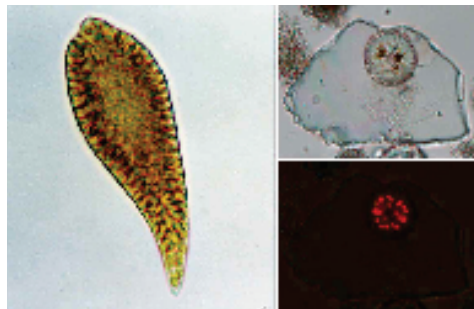
環境保全研究センター

健全な沿岸環境が支える 豊かな海の恵み

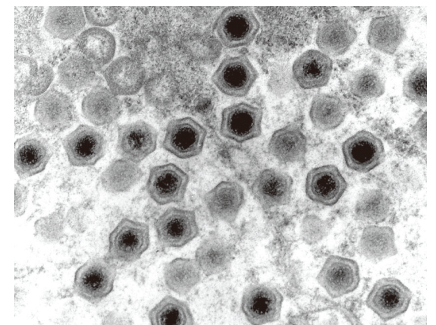
瀬戸内海をはじめとする沿岸海域は、天然の海産物を育む重要な場所であると同時に、養殖生産の場所としても非常に重要です。私たちが沿岸海域からもたらされる海の幸を継続して利用していくためには、海の環境についてより良く知り、健全な環境を守るための努力をすることが必要です。環境保全研究センターでは、健全な環境づくりに役立つ調査・研究開発を行っています。

有害・有毒藻類グループ

微小なプランクトンが引き起こす赤潮や貝毒は、増養殖を中心とした水産業に大きな被害をもたらします。有害・有毒藻類グループでは、赤潮や貝毒の発生機構解明、予察技術開発、被害防止技術開発など、健全な漁場環境を守るための研究開発を行っています。



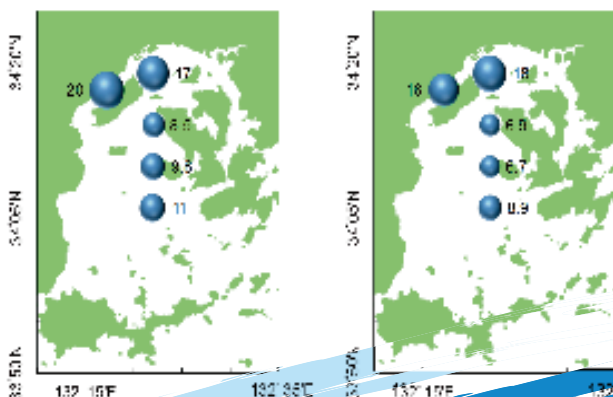
有害赤潮プランクトンの一種シャットネラの栄養細胞（左）とシスト（右）



有害赤潮プランクトンの一種ヘテロカプサに感染するウイルス

化学物質グループ

私たちの大切な海に流れこむ様々な化学物質は、そこに暮らす生きものたちに脅威を与えています。有害物質グループでは、有害な化学物質の挙動や生物への影響調査、除去技術の開発など、海と海の生きものたちに優しい環境を守るための研究開発を行っています。



ガスクロマトグラフ質量分析計
(微量な化学物質の分析に使用する)



調査船での海洋調査
底質や海水の採取

統計モデルを用いた広島湾における多環芳香族炭化水素化合物の濃度予測（実測値（左）と推定値（右））

海産無脊椎動物研究センター

豊かな食生活と干潟の生態系を支える

二枚貝類と甲殻類

アサリ等の二枚貝類やクルマエビ・ガザミ等の甲殻類は、干潟の生態系を支える重要な生き物であると同時に、私たちの食生活に必要な水産資源です。これらの生物の資源を増やして安定的に食卓に供給するためには、減ってきた資源を回復させることと、人の手で育てて増やすことが重要です。海産無脊椎動物研究センターでは、二枚貝類と甲殻類を「守り育てる」研究を通して、沿岸漁業や養殖業の振興に貢献します。

貝類グループ

貝類グループでは、二枚貝類の成長、成熟等の生理生態の研究、高品質な稚貝を安定的に生産し養殖に利用するための研究、漁場を保護・管理し資源回復を図るための研究を行います。



クルマエビ

甲殻類グループ

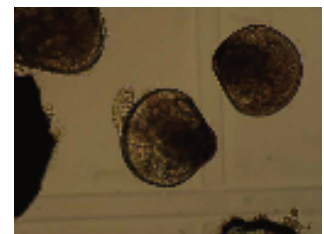
甲殻類グループでは、高品質な種苗を安定的に生産するための研究、種苗放流の効果を検証し資源回復を図るための研究を行います。



ガザミのメガロパ幼生



二枚貝類飼育実験棟の全景



アサリ着底稚貝



実験池の全景



二枚貝類の幼生飼育



微細藻類（二枚貝類の餌）の培養

しらふじ丸

水産研究・教育機構の 大きな特徴である**漁業調査船**

瀬戸内海を中心とした海洋学的・生物学的研究を担う漁業調査船です（総トン数138トン）。水中テレビロボ、超音波流向流速計、電磁伝送方式CTD等の最新測定機器に加え、専用研究室を備えており、種々の調査の効率的な実施が可能です。



しらふじ丸の全景



プランクトンネット



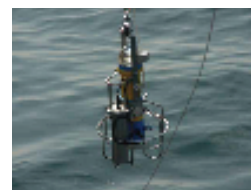
自動観察・採水装置



SM採泥器



コア一柱状採泥器



水温・塩分測定センサー



水中テレビロボ



バンドン採水器



卵・稚魚ネット

しらふじ丸主要目

全長	36.50m
幅（型）	6.90m
深さ（型）	2.95m
総トン数	138トン
燃料油タンク容積	60.6m ³
清水タンク容積	37.9m ³
最大搭載人員	22人
最大速力	12.76ノット
航海速力	11.00ノット
航続距離	約3,700海里
竣工年月日	昭和58年3月10日
建造所	三菱重工業（株）下関造船所

こたか丸

水産研究・教育機構の 大きな特徴である**漁業調査船**

平成23年10月から派遣されていた福島県での震災復興支援を終え、平成26年8月に瀬戸内水研に配置されました。今後、しらふじ丸とともに、瀬戸内海を中心とした海洋学的・生物学的研究調査を実施します。



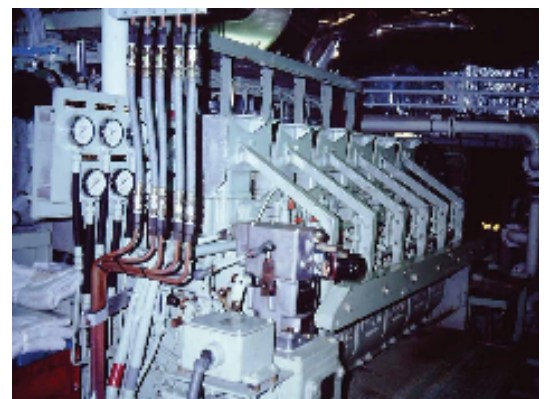
こたか丸の全景



船尾Aフレーム



観測室



機関室

こたか丸主要目

全長	30.02m
幅(型)	5.37m
深さ(型)	2.37m
総トン数	59トン
燃料油タンク容積	21.65 ^m
清水タンク容積	3.62 ^m
最大搭載人員	10人
最大速度	13.50ノット
航海速度	12.00ノット
航続距離	約1,000海里
竣工年月日	平成7年3月16日
建造所	ヤマハ発動機(株)蒲郡工場



各庁舎へのアクセス

廿日市庁舎

J R山陽本線大野浦駅（J R広島駅より西方面・約40分）を下車、徒歩約25分。

伯方島庁舎

西瀬戸自動車道伯方島インター下車、自動車で約10分。

今治港より高速船木浦港下船、徒歩30分。

百島庁舎

J R尾道駅前棧橋発、福田港下船、徒歩5分。

屋島庁舎

J R高徳線屋島駅からタクシーで10分 約1,300円

高松琴平電気鉄道志度線八栗駅からタクシーで5分 約1,000円

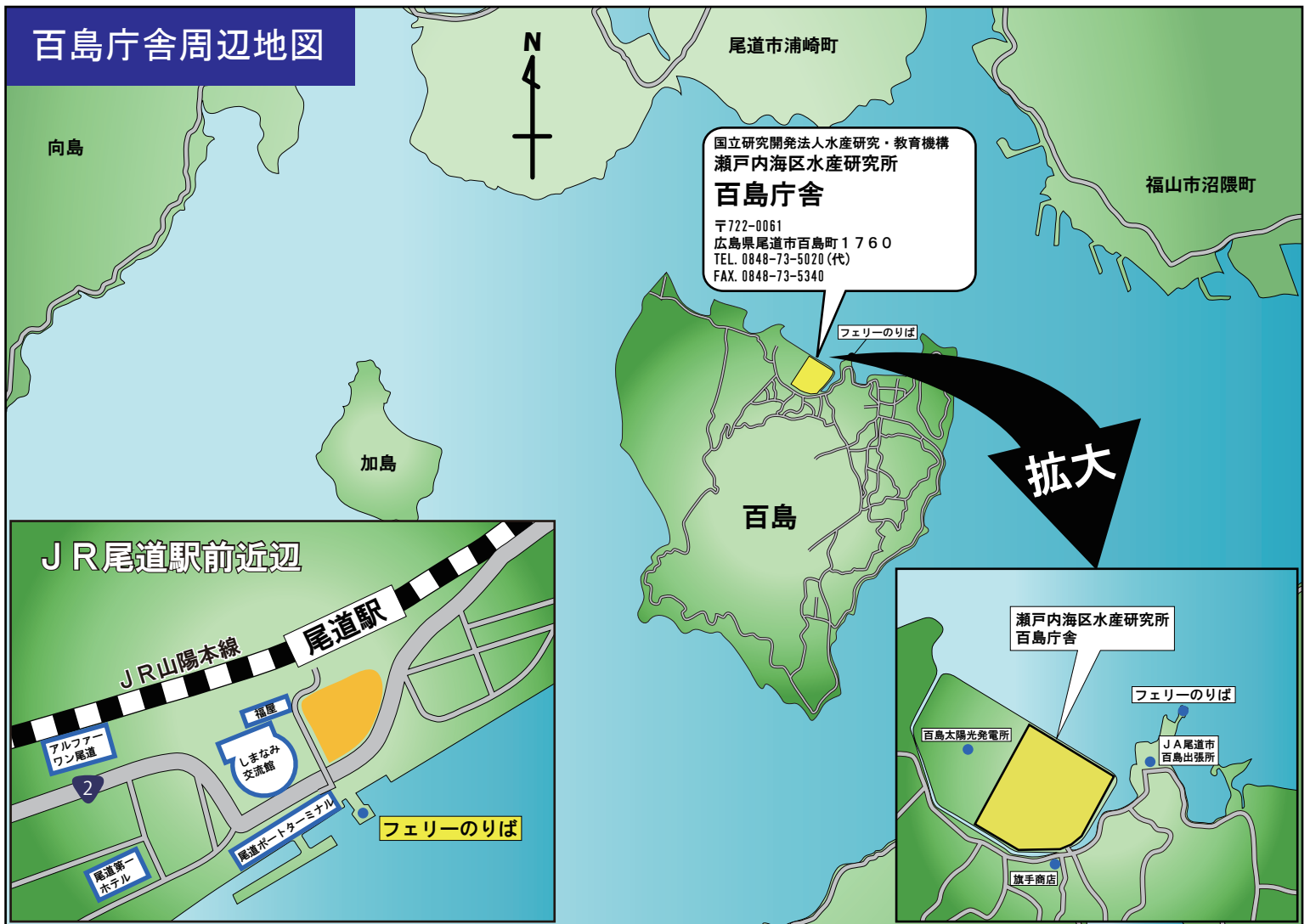
廿日市庁舎周辺地図



伯方島庁舎周辺地図



百島庁舎周辺地図



屋島庁舎周辺地図

